報告事項No. ２

令和8年度　川崎市学習状況調査　報告　概要

はじめに

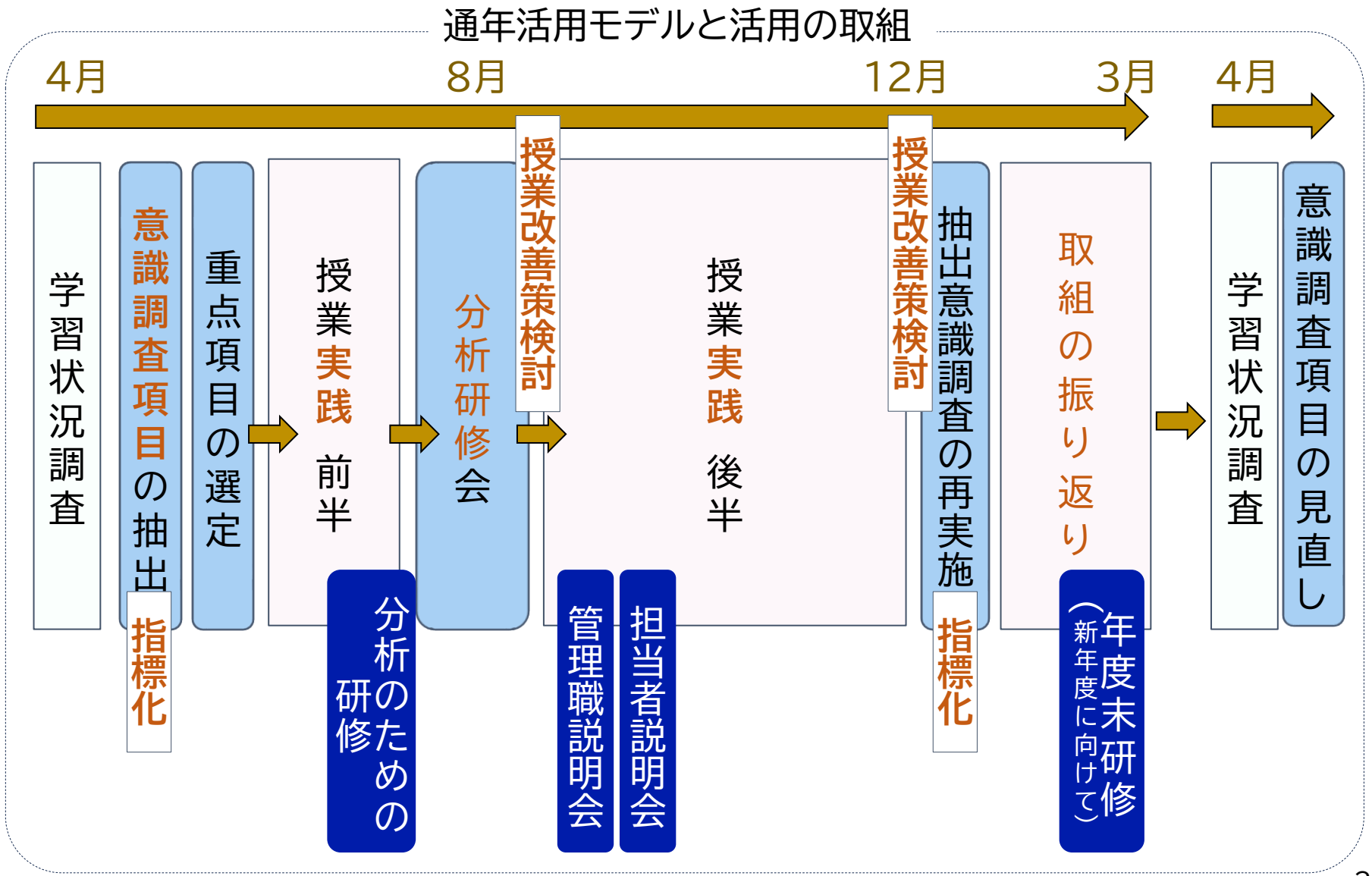
○川崎市学習状況調査は、年間を通じて授業改善を行うため「通年活用モデル」を設定している。

通年活用モデルは

・**4月**
前年度の意識調査項目の中から各学校の実態に合わせて重点項目を定め、授業実践を行う。

・**8月**
今年度の調査結果をもとに学力分析や意識調査の分析を詳細に行い、4月に定めた重点項目等を再検討し、授業改善を行う。

・**12月～年度末**
8月から行った授業改善策の成果と課題を洗い出し、次年度の重点項目設定につなげる。



第1章　川崎市学習状況調査の概要

Ⅰ　調査の概要

１　調査の目的

○児童生徒、保護者は、学習の取組を振り返り、課題を的確に把握し、学習改善に生かす。

○学校は、学校教育目標等で示した資質・能力の育成に向けて、調査結果を分析し、個に応じた指導や学校（学年）での授業改善、教育課程編成等に生かす。

○校長会、各研究（部）会は、教育委員会と連携して全市的な結果の分析と授業改善の具体的な手立て、個に応じた指導の手立て等を研究し、説明会や各研究（部）会の事業等で教員に伝達する。

○教育委員会は、全市的な児童生徒の学習状況を経年調査することにより、学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。

２　調査の内容

○**教科調査**　　**小学校　国語・算数**　　**中学校　国語・社会・数学・理科・英語**

　調査の目的に基づき、学習指導要領に定める内容のうち、ペーパーテストで調査を行うことが適当な項目について調査を実施した（前年度までの学習範囲）。

○**学習意識調査**

　児童生徒の学習や生活に対する意識等について明らかにするために、児童生徒を対象とする調査を実施した。

○調査の対象及び人数

　市内全市立小学校の第４学年 11,492名、第５学年 11,780名、第６学年 11,874名

　市内全市立中学校の第１学年 9,342名、第２学年 9,266名、第３学年 9,135名

○調査実施期間　　令和８年４月７日（火）～２４日（金）

Ⅱ　分析方法について

・4層分析について

　調査の目的の実現に向けて、より詳しい学力層別の傾向や状況を把握し、各層に適した支援や学習改善、授業改善に生かすために、4層分析を行っている。

　この4層分析は、教科調査において、川崎市内の受検者を、教科ごとに調査結果の高い者から並べ、意識調査は、小学校は2教科、中学校は5教科の合計点で並べ、上位からおおむね25%ずつをA～D層の4層に分け、その結果を分析するものである。教科調査の数値はA～D層のそれぞれの平均正答率を示している。意識調査の数値は肯定的な回答割合(「よくわかっている」「まあわかっている」等)を示している。

・教科調査の分析及び学習意識調査の分析の視点について

　教科調査…全体との比較　　同一母集団の経年比較　　4層分析におけるC-D層間の差の比較

　学習意識調査…4層分析とC、D層の経年変化の比較

・表の見方について

【全体(参加自治体全体)との比較】

　例．令和8年度小学校2教科平均正答率の全体との差

R8	2教科平均正答率		
	川崎	全体	差
小4	70.3	70.0	+0.3
小5	64.9	64.1	+0.8
小6	63.6	63.0	+0.6

令和8年度小学校6年生2教科平均正答率の全体との差
(令和8年度市の6年生の2教科平均正答率)
　　－(令和8年度全体の6年生の2教科平均正答率)
＝ 63.6 － 63.0
＝ +0.6

【経年比較】　例.【理解度】同一母集団の4層ごとの経年変化（小学校4教科平均）

年度・学年	学年の平均	A層	B層	C層	D層
R8・小6	86.4	97.1	92.1	85.2	71.7
R7・小5	85.3	96.0	90.7	84.6	69.9
R6・小4	85.4	94.7	89.7	84.4	72.5

+1.8

令和8年度小学校6年生D層の前年度との経年比較（差）
（令和8年度小6D層の肯定的回答率）－（令和7年度小5D層の肯定的回答率）
＝ 71.7 － 69.9
＝ +1.8

【C-D層の差】　例. 4層分析 と C-D層間の差（小学校国語の平均正答率）

小　国語	川崎市学力層別				
	A層	B層	C層	D層	C-D差
R8・小4	94.2	81.6	67.2	40.8	26.4
R8・小5	87.0	74.7	62.2	41.3	20.9
R7・小4	96.7	86.7	74.2	44.7	29.5
R8・小6	85.4	70.9	58.3	39.3	19.0
R7・小5	90.6	76.4	62.2	40.1	22.1
R6・小4	90.0	76.5	63.2	38.3	24.9

令和8年度小学校6年生における
（C層の平均正答率）－（D層の平均正答率）
＝ 58.3 － 39.3
＝ 19.0

第2章　カリキュラムセンター・分析委員会による分析

Ⅰ　これまでの取組

１　令和6年度までの手立て

令和6年度までの結果において、小学校2教科、中学校5教科の平均正答率を見ると、C-D層間の差が他の層間に比べて大きいことと、学習意識調査の理解度の項目について同一母集団の経年比較を4層に分けて見ると、D層の低下の幅が大きいことから、D層に特に注視して、次のような手立ての実践を大切に授業改善に取り組めるよう進めてきた。

1　「何がわかっていて、何がわかっていないか」について、児童生徒が自覚できるようにする。

2　わからないことに対して諦めず、粘り強く取り組むために、ねらいを明確にしたペア学習やグループ学習を取り入れる。

3　いつでもGIGA端末等を活用して、学習に取り組める環境を整備する。

2　令和7年度に加えたC、D層を支援するための重視するポイント

令和7年度の分析で**次の2点に着目し、下の質問項目を指標とし、重視するポイントを定めた**。

・D層の上昇は見られる箇所があるものの、C-D層間の差は大きく、引き続きD層に注視した取組が必要

・理解度の結果と様子が似ている質問項目に着目し、その項目からより具体的な手立ての検討が必要

質問項目　**授業で習ったことはそのまま覚えるのではなく、その理由や考え方も一緒に理解しようとしている。**

重視するポイント

○ C、D層の疑問や考えを大切にした授業展開を心がける

・C、D層の「ここまでできたけど、この先が…」や「この前学習した○○を使いたいけど…」など、つぶやきや様子を見取り、途中まで考えた意見や考えを大切にすること。

質問項目　**自分の意見や考えを相手にわかりやすく伝えることができる。**

重視するポイント

○ 「わからない」や「途中までわかる」を踏まえた、自分の考えを表現できるようにする

・考えたことや聞いたことなどを、他者に向けて表現する機会を意図的・計画的に設定する。

質問項目　**算数・数学の授業で、文章や式、図や表などを組み合わせて自分の考えを説明したことがある。**

重視するポイント

○ いくつかの考え方を関連付けて理解できるようにする

・児童生徒の多様な考えの中にある、各教科等で大事にしている考え方に焦点を当てられるように、その考えを価値づけたり、発問や問い返しを工夫したり、板書の構造化を図ったりして理解につなげる。

Ⅱ　小中学校の教科調査結果と分析

赤枠 成果と捉えられる点
青枠 課題と捉えられる点

1　各教科の結果概要

○同一母集団の経年比較　川崎市と参加した自治体全体（以降「全体」と表記）の差
（令和6年度から令和8年度）　　※値は、川崎市と全体のポイントの差を表しています。

小学校　2教科平均正答率（国語、算数）

	川崎と全体の平均正答率の差		
	R6 小4	R7 小4	R8 小4
小6	+0.6		
小5	+1,1	+0.8	
小4	+0.4	+1.6	+0.3

中学校　5教科平均正答率（国語、社会、数学、理科、英語）

	川崎と全体の平均正答率の差		
	R6 中1	R7 中1	R8 中1
中3	+2.2		
中2	+1,5	+1.7	
中1	−0.1	−0.3	+0.3

全体との差について同一母集団の経年変化を見ると、

・小学校はすべての学年が、経年で見ても参加自治体全体を上回っている。

・現中3は、学年が上がるにつれて上昇して川崎市が全体を上回っている。

○同一学年（令和５～８年の比較）

令和６年度までに行ってきた手立ての結果として、次のような結果が見られた。

教科調査の平均正答率（小学校は２教科、中学校は５教科）
同一学年（小６、中３）の４層分析
小学校

2教科平均	市	全体	差	A層	B層	C層	D層
R8・小6	63.6	63.0	+0.6	89.2	73.8	57.3	34.2
R7・小6	68.3	66.9	+1.4	93.4	79.9	63.2	36.6
R6・小6	61.5	60.6	+0.9	88.5	71.2	54.7	31.7
R5・小6	66.7	66.7	±0	90.6	76.4	61.2	38.5

中学校

5教科平均	市	全体	差	A層	B層	C層	D層
R8・中3	58.5	56.3	+2.2	85.2	68.8	51.0	29.1
R7・中3	59.6	57.7	+1.9	87.0	70.6	52.8	31.9
R6・中3	57.7	55.5	+2.2	84.6	67.8	50.5	28.0
R5・中3	60.0	55.6	+4.4	86.2	69.7	53.2	31.0

小6と中3は、これまで実施したすべての学年で、全体より上回っている。

○教科調査における4層分析 と C-D層間の差

※「A層」「B層」「C層」「D層」の欄は平均正答率（%）を、「C-D差」の欄はC層とD層のポイントの差を表しています。

小学校

2教科平均	A層	B層	C層	D層	C-D差
R8・小6	89.2	73.8	57.3	34.2	23.1
R7・小5	92.3	79.9	65.7	39.0	26.7
R6・小4	91.7	79.4	66.3	39.6	26.7
層間の差		15.4	16.5	23.1	

中学校

5教科平均教科	A層	B層	C層	D層	C-D差
R8・中3	85.2	68.8	51.0	29.1	21.9
R7・中2	86.8	70.1	54.2	33.2	21.0
R6・中1	86.2	72.7	60.7	40.2	20.5
層間の差		16.4	17.8	21.9	

各層間に着目すると、**小中ともにC-D層間が他の層間よりも大きく開いている。**

低位層、**特にD層への一層の支援が必要。**

Ⅲ　学習意識調査の結果

○【授業の理解度】

現小6、中3の同一母集団の4層ごとの経年変化

※数値は「授業がよくわかっている、まあわかっている」と肯定的な回答をした児童生徒の割合（%）。

小学校（4教科平均）　現小6

	学年の平均値	A層	B層	C層	D層
R8・小6	86.4	97.1	92.1	85.2	71.7
R7・小5	85.3	96.0	90.7	84.6	69.9
R6・小4	85.4	94.7	89.7	84.4	72.5

昨年度小6

R7・小6	83.9	96.2	90.3	81.8	67.6
R6・小5	85.3	96.2	90.7	84.0	70.5
R5・小4	85.6	94.7	90.1	84.7	72.6

中学校（5教科平均）　現中3

	学年の平均値	A層	B層	C層	D層
R8・中3	71.6	92.8	82.6	67.2	44.7
R7・中2	66.2	90.1	76.4	58.5	40.1
R6・中1	71.7	89.9	77.9	67.8	50.5

昨年度中3

R7・中3	66.4	89.8	76.6	60.5	39.9
R6・中2	66.0	90.1	75.5	59.3	39.7
R5・中1	71.1	90.1	78.6	65.8	50.2

小5から小6にかけては下がる傾向にありましたが、今年度は上昇し、中2から中3にかけては、すべての層が前年度より上昇していた。取組の成果が表れていると考えられる。

○【授業の理解度】
現小5、中2の同一母集団の4層ごとの経年変化

※数値は「授業がよくわかっている、まあわかっている」と肯定的な回答をした児童生徒の割合(%)。

小学校(4教科平均)

現小5

	学年の平均値	A層	B層	C層	D層
R8・小5	87.3	97.0	92.8	86.1	73.4
R7・小4	84.7	94.5	90.3	83.7	70.7

現小6

R8・小6	86.4	97.1	92.1	85.2	71.7
R7・小5	85.3	96.0	90.7	84.6	69.9
R6・小4	85.4	94.7	89.7	84.4	72.5

中学校(5教科平均)

現中2

	学年の平均値	A層	B層	C層	D層
R8・中2	71.2	93.2	81.7	65.2	45.2
R7・中1	71.5	89.5	78.2	68.2	50.2

−3.0　−5.0

現中3

R8・中3	71.6	92.8	82.6	67.2	44.7
R7・中2	66.2	90.1	76.4	58.5	40.1
R6・中1	71.7	89.9	77.9	67.8	50.5

−9.3　−10.4

下降傾向にあった小4から小5にかけてのD層が上昇している。また、中1から中2にかけては、C層、D層は下降しているものの、現中3の中1から中2の下降と比べてその度合いは小さくなっている。同様に取組の成果が表れていると考えられる。

※数値は「とてもあてはまる」「まああてはまる」と肯定的回答をした割合（%）。

○【学習への意識】理解度と似た傾向の質問項目

質問項目　授業で習ったことはそのまま覚えるのではなく、その理由や考え方も一緒に理解しようとしている。

今年度小6

	学年の平均値	A層	B層	C層	D層
R8・小6	74.8	89.7	79.6	70.3	59.7
R7・小5	68.6	83.4	73.0	63.0	55.3
R6・小4	72.1	80.1	73.9	71.8	62.4

今年度中2

	学年の平均値	A層	B層	C層	D層
R8・中2	70.9	88.1	78.2	65.7	52.1
R7・中1	66.0	82.1	72.1	61.1	48.9

昨年度小6

R7・小6	83.9	96.2	90.3	81.8	67.6
R6・小5	85.3	96.2	90.7	84.0	70.5
R5・小4	85.6	94.7	90.1	84.7	72.6

今年度中3

R8・中3	75.0	91.0	82.6	70.5	56.1
R7・中2	62.3	82.5	68.0	56.1	42.7
R6・中1	66.9	81.8	72.5	63.7	49.5

低下する傾向にあった小5から小6にかけて、中1から中2にかけて、と、今年度小6、中2は上昇している。理解度と似た傾向にあり、今後もこの項目との関連に注視していく。

※数値は「とてもあてはまる」「まああてはまる」と肯定的回答をした割合（%）。

○【学習への意識】理解度と似た傾向の質問項目

質問項目　自分の意見や考えを相手にわかりやすく伝えることができる。

	学年の平均値	A層	B層	C層	D層
R8・中3	72.4	81.5	77.6	70.5	60.7
R7・中2	61.0	73.1	66.5	57.9	47.1
R6・中1	63.2	74.5	69.0	58.6	51.0

質問項目　算数・数学の授業で、文章や式、図や表などを組み合わせて自分の考えを説明したことがある。

	学年の平均値	A層	B層	C層	D層
R8・中3	64.8	88.2	77.0	60.9	34.1
R7・中2	53.1	75.6	61.8	46.1	30.0
R6・中1	64.4	84.6	74.1	61.2	38.3

学力層が低くなるにつれて、層間の差が開いており、C層、D層は、説明したり、複数のことを関連付けて考えたりすることが難しいことが考えられる。理解度と似た傾向であり今後も注視していく。

これら①、②、③は理解度との関連が考えられるため、授業改善の視点として、今後も注視していく。

Ⅳ 「わかる」授業プロジェクトについて

○「わかる」授業づくりを検討する研究会議と本調査結果分析

国語、算数・数学、英語で研究会議を発足し、共通の3つの柱を掲げて研究を進めている。

【研究会議】

・参加校　市内　小学校4校　中学校8校　計12校

・進め方　参加校において授業実践を展開し、行った検証授業から好事例を蓄積していく。
検討、協議においては、教育政策室、市総合教育センター全室が関わって進めていく。
（カリキュラムセンター、情報・視聴覚センター、教育相談センター、特別支援センター）
市学習状況調査の学習意識調査項目を指標に使い、データ分析をし、授業改善に生かす。

・期間等　1年間
研究報告会を2027年1月に実施予定。年度末には研究をまとめる。
研究で得た改善につながる手立てを、全市に発信していく。

【3つの柱】 本報告書で挙げている手立てを実現するための柱

1　目指す姿の明確化
← 「何がわかっていて、何がわかっていないか」について、児童生徒が自覚できるようにする。

2　自分の考えをより良くするための、共有の場の設定と工夫
← わからないことに対して諦めず、粘り強く取り組むために、ねらいを明確にしたペア学習やグループ学習を取り入れる。

3　子どもが目指す姿を実感できる振り返りの工夫
← いつでもGIGA端末等を活用して、学習に取り組める環境を整備する。

参考資料　教育委員会事務局各部署による分析

教育政策室（キャリア在り方生き方教育・探究担当）

キャリア在り方生き方教育の視点「自分をつくる」

質問内容：将来の夢や目標を持っている。
＜肯定的な回答割合と4層分析データから＞

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和8年度・小4	87.1	86.9	87.6	88.2	86.4	0.5
令和8年度・小5	84.3	83.5	85.1	85.1	83.9	-0.4
令和7年度・小4	86.9	87.1	87.6	88.6	84.3	2.8
令和8年度・小6	79.6	77.9	79.5	81.1	81.5	-3.6
令和7年度・小5	84.5	84.0	83.9	84.7	85.4	-1.4
令和6年度・小4	86.6	86.9	87.3	88.4	83.6	3.3
令和8年度・中1	79.8	77.9	80.2	80.9	81.1	-3.2
令和8年度・中2	70.0	69.7	69.0	68.9	73.1	-3.4
令和7年度・中1	80.8	78.4	80.2	82.3	82.4	-4.0
令和8年度・中3	76.1	79.7	77.0	75.8	72.5	7.2
令和7年度・中2	69.0	68.0	68.9	68.8	70.6	-2.6
令和6年度・中1	80.1	79.3	79.3	80.0	81.9	-2.6

質問内容：自分には、よいところがあると思う。
＜肯定的な回答割合と4層分析データから＞

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和8年度・小4	82.8	86.8	85.4	82.5	77.5	9.3
令和8年度・小5	81.7	84.4	84.5	81.8	76.6	7.8
令和7年度・小4	85.0	88.0	87.4	85.6	78.9	9.1
令和8年度・小6	79.7	82.4	82.0	79.9	74.7	7.7
令和7年度・小5	82.3	86.3	83.3	82.3	77.4	8.9
令和6年度・小4	83.9	88.0	85.5	83.9	78.0	10.0
令和8年度・中1	78.8	83.0	81.8	78.3	73.3	9.7
令和8年度・中2	77.1	80.5	78.8	77.5	72.1	8.4
令和7年度・中1	80.0	82.1	81.9	79.2	77.3	4.8
令和8年度・中3	69.0	68.8	68.8	70.1	68.7	0.1
令和7年度・中2	76.7	79.9	78.4	75.9	73.0	6.9
令和6年度・中1	78.3	81.2	80.3	77.4	74.4	6.8

キャリア在り方生き方教育の視点「自分をつくる」

質問内容：将来の夢や目標を持っている。
＜肯定的な回答割合と4層分析データから＞

【分析結果】
　中学2年生の肯定的な回答の割合は中学1年生より約10ポイント低く、昨年度と同様の傾向です。一方、同一母集団で見ると、中学3年生は中学2年生時より肯定的な回答の割合が高く、進路選択が具体化する中で、夢や目標をより明確に意識するようになることが考えられます。小学5・6年生と中学1・2年生ではA層よりD層の割合が高く、夢や目標をもつことは、学習の理解度に比例するものではないと考えられます。

質問内容：自分には、よいところがあると思う。
＜肯定的な回答割合と4層分析データから＞

【分析結果】
　小学6年生の同一母集団では、83.9%、82.3%、79.7%となっています。成長に伴い、客観的に自分を見つめ、長所とともに課題にも気づくことが要因として考えられます。中学3年生でも、78.3%、76.7%、69.0%となっています。一方、A－D層の差は0.1ポイントで、学力層による差はほとんど見られません。

【実態に応じた取組の工夫】
「好き」や「得意」を踏まえ、「就きたい職業」に限らず、「なりたい自分の姿」から将来の夢や目標をもてるように、キャリア形成を支援することが大切です。「キャリア在り方生き方ノート」や「キャリア・パスポート」を活用し、学習や学校行事、児童会・生徒会活動等を振り返り、自分のよさや成長に気づくとともに、互いのよさや可能性を認め合う機会を充実させることが重要です。
　また、結果だけでなく、挑戦した努力や工夫、失敗から学んだ過程を価値づけ、取組の意味や成長を実感できるようにすることや、安心してチャレンジする場を設け、その経験を将来の生き方や目標につなげることが大切です。

キャリア在り方生き方教育の視点「みんな一緒に生きている」

質問内容：学級みんなで協力して何かをやりとげうれしかったことがある。
＜肯定的な回答割合と4層分析データから＞

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和8年度・小4	89.1	91.7	90.4	89.4	85.4	6.3
令和8年度・小5	89.5	91.9	90.3	89.8	86.3	5.6
令和7年度・小4	89.2	91.8	91.4	89.4	84.4	7.4
令和8年度・小6	90.2	90.8	91.4	91.0	88.1	2.7
令和7年度・小5	88.9	91.2	90.2	89.4	84.8	6.4
令和6年度・小4	89.0	91.2	91.2	90.2	83.5	7.7
令和8年度・中1	87.6	90.1	89.1	88.3	84.2	5.9
令和8年度・中2	89.3	90.3	91.3	89.6	87.0	3.3
令和7年度・中1	88.4	89.7	90.1	88.3	85.5	4.2
令和8年度・中3	86.8	88.6	88.2	87.6	83.5	5.1
令和7年度・中2	86.3	89.0	87.9	85.8	82.7	6.3
令和6年度・中1	87.4	89.9	88.9	87.1	83.7	6.2

質問内容：人が困っているときは進んで助けている。
＜肯定的な回答割合と4層分析データから＞

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和8年度・小4	90.4	92.4	91.7	91.4	87.3	5.1
令和8年度・小5	91.0	92.5	91.8	91.3	88.9	3.6
令和7年度・小4	91.4	93.7	93.7	91.7	86.7	7.0
令和8年度・小6	90.9	91.6	92.5	92.2	88.6	3.0
令和7年度・小5	91.7	93.4	92.8	91.2	89.5	3.9
令和6年度・小4	91.9	93.6	93.1	93.2	87.6	6.0
令和8年度・中1	91.1	92.2	91.4	92.6	89.1	3.1
令和8年度・中2	91.0	91.0	92.1	92.0	89.5	1.5
令和7年度・中1	93.1	92.2	94.9	93.7	91.8	0.4
令和8年度・中3	89.8	84.0	83.5	84.6	82.5	1.5
令和7年度・中2	90.1	90.1	91.9	90.5	88.0	2.1
令和6年度・中1	92.3	93.2	92.7	92.5	91.2	2.0

キャリア在り方生き方教育の視点「みんな一緒に生きている」

質問内容：学級みんなで協力して何かをやりとげうれしかったことがある。
＜肯定的な回答割合と4層分析データから＞

【分析結果】
肯定的な回答の割合は、全ての学年で85%以上となっています。小学6年生の同一母集団では、89.0%、88.9%、90.2%と高い水準を維持し、A－D層の差も7.7ポイントから2.7ポイントへ縮小しています。協力して取り組む活動を通して、所属感や充実感が育まれていると考えられます。また、中学3年生の同一母集団では、87.4%、86.3%、86.8%と大きな変化はなく、協働することの価値を継続して実感していることが考えられます。

質問内容：人が困っているときは進んで助けている。
＜肯定的な回答割合と4層分析データから＞

【分析結果】
肯定的な回答の割合は、全ての学年で90%前後となっており、困っている人を進んで助けようとする意識の高さが読み取れます。小学6年生の同一母集団では、91.9%、91.7%、90.9%と高い水準を維持し、A－D層の差も6.0ポイントから3.0ポイントへ縮小しています。また、中学3年生の同一母集団では、92.3%、90.1%、89.8%と推移しています。学力層による差はほとんどなく、他者を思いやり、支え合おうとする意識が育まれていると考えられます。

【実態に応じた取組の工夫】
学級活動や学校行事等では、児童生徒一人ひとりが役割をもち、共通の目標に向けて協力する活動を充実させることが大切です。その際、結果だけでなく、互いに支え合った過程や一人ひとりの工夫、貢献を振り返り、達成感や所属感、自己有用感を味わえるようにします。また、困っている人に気づき、相手の立場や思いを考えて適切に行動できるよう、日常の具体的な場面を取り上げて考える機会を設けることも重要です。「かわさき共生＊共育プログラム」のエクササイズ等も活用しながら、互いのよさや違いを認め、安心して助け合える豊かな人間関係づくりを進めることが大切です。

キャリア在り方生き方教育の視点「わたしたちのまち川崎」

質問内容：自分の住んでいる町がすきである。
＜肯定的な回答割合と4層分析データから＞

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和8年度・小4	93.1	94.9	94.6	93.5	90.3	4.6
令和8年度・小5	92.1	94.2	93.1	92.9	88.7	5.5
令和7年度・小4	92.4	94.7	93.2	93.3	88.4	6.3
令和8年度・小6	90.5	90.0	92.0	91.4	88.6	1.4
令和7年度・小5	91.1	91.7	92.2	91.6	88.9	2.8
令和6年度・小4	92.3	95.0	93.4	92.7	88.0	7.0
令和8年度・中1	89.0	90.5	90.1	89.2	87.2	3.3
令和8年度・中2	87.6	88.1	88.6	88.4	86.1	2.0
令和7年度・中1	88.8	88.5	89.8	89.1	87.9	0.6
令和8年度・中3	83.5	84.0	83.5	84.6	82.5	1.5
令和7年度・中2	85.1	85.5	85.7	85.0	84.4	1.1
令和6年度・中1	88.2	90.3	89.2	87.9	85.6	4.7

質問内容：地域や社会をよくするために、何かしたいと思ったことがある。
＜肯定的な回答割合と4層分析データから＞

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和8年度・小4	75.6	79.0	77.2	76.3	71.6	7.4
令和8年度・小5	73.4	78.8	75.0	72.5	67.5	11.3
令和7年度・小4						
令和8年度・小6	70.2	72.2	73.2	71.1	65.0	7.2
令和7年度・小5						
令和6年度・小4						
令和8年度・中1	66.6	71.3	68.9	66.1	61.2	10.1
令和8年度・中2	59.0	61.1	59.5	60.3	55.9	5.2
令和7年度・中1						
令和8年度・中3	49.5	51.8	52.2	49.4	44.9	6.9
令和7年度・中2						
令和6年度・中1						

キャリア在り方生き方教育の視点「わたしたちのまち川崎」

質問内容：自分の住んでいる町がすきである。
＜肯定的な回答割合と4層分析データから＞

【分析結果】
肯定的な回答の割合は、全ての学年で83%以上となっています。小学6年生の同一母集団では、92.3%、91.1%、90.5%と緩やかに低下する一方、A－D層の差は7.0ポイントから1.4ポイントへ縮小しています。中学3年生でも88.2%、85.1%、83.5%と推移していますが、学力層による差は小さくなっています。

質問内容：地域や社会をよくするために、何かしたいと思ったことがある。
＜肯定的な回答割合と4層分析データから＞

【分析結果】
「自分の住んでいる町がすきである」と比べて肯定的な回答の割合が低く、地域に好感をもっていても、行動意欲に結び付いていない児童生徒がいると考えられます。また、学年が上がるにつれて肯定的な回答の割合が低くなる傾向が見られます。学年が上がるにつれて、地域や社会の課題をより現実的に捉え、自分一人では解決が難しいと考えるようになることが一因と考えられます。

【実態に応じた取組の工夫】
地域への愛着を社会参画につなげるためには、地域のよさや課題を自分事として捉え、地域や社会のために主体的に行動する機会を充実させることが大切です。総合的な学習の時間等において、地域の人々と関わりながら課題を見いだし、解決に向けて考えたことを提案・発信する学習を進めます。その際、「キャリア在り方生き方ノート」や「キャリア・パスポート」を活用し、地域との関わりを通して得た気づきや自分の役割を振り返り、取組の意味や成果を実感できるようにすることが重要です。また、コミュニティ・スクールを活用した地域連携を推進し、児童生徒が社会の創り手として主体的に参画できるよう、教育活動を計画的に位置づけることも大切です。

SOSの出し方・受け止め方教育（教育相談センター）

質問内容：不安や悩み、ストレスがあるとき、誰かに相談できている。
＜肯定的な回答割合と4層分析データから＞

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和8年度・小4	64.3	68.2	65.8	65.4	58.5	9.7
令和8年度・小5	63.4	66.1	65.2	63.1	59.4	6.7
令和7年度・小4	67.3	69.3	67.9	67.5	64.2	5.1
令和8年度・小6	63.8	64.7	65.3	64.1	61.8	2.9
令和7年度・小5	64.0	66.5	65.0	62.0	62.6	3.9
令和6年度・小4	68.6	70.9	69.0	69.6	64.6	6.3
令和8年度・中1	66.1	70.0	67.2	66.1	62.7	7.3
令和8年度・中2	68.7	71.5	70.8	69.4	64.2	7.3
令和7年度・中1	66.1	67.6	66.3	66.4	64.4	3.2
令和8年度・中3	71.9	75.3	72.5	72.3	68.4	6.9
令和7年度・中2	66.5	69.7	68.7	64.6	63.3	6.4
令和6年度・中1	65.7	68.4	67.2	65.0	62.4	6.0

【分析結果】
　中学3年生では、学年が上がるにつれて市全体の肯定的な回答の割合が上がっています。また、いずれの学年でもD層に「相談できていない」と感じている児童生徒が多いことが読み取れます。

【実態に応じた取組の工夫】

　「かわさき共生＊共育プログラム」に位置付けている「川崎市SOSの出し方・受け止め方教育」を引き続き推進します。

　「川崎市SOSの出し方・受け止め方教育」は、児童生徒が日常的なストレスや不安を解消し、自分らしく生き抜いていくために必要な力として、自分の心の状態を理解して早期に問題を認識する力や、相談する力（援助希求的態度）の促進を図ることを目的とした取組です。
　「相談すること」への心理的なハードルを低くするためには児童生徒が「相談とはどのようなことなのか」ということについてより理解を深められるよう、「相談」という言葉が表す具体的な行動や内容を例示するなど、継続的に、児童生徒と確認していくことが大切です。

　また、それとともに、子どもも大人もSOSを受け止める「受容傾聴」の姿勢について理解し、安心して相談できる環境づくりをしていくことが必要です。
　教育相談の場面では、その児童や生徒への理解に基づいて行うことや、あらゆる場面に通用する指導や支援の方法は存在しないことを理解し柔軟な働きかけを目指すこと、どの段階でどのような指導・援助が必要かという時間的視点を持つことなどを心がけることが大切です。

教育政策室人権・多文化共生教育担当

質問内容：自分のことは自分で決められるよう、身近な大人が助けてくれる。
＜肯定的な回答割合と4層分析データから＞

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和8年度・小4	86.6	90.6	88.0	87.0	80.6	10.0
令和8年度・小5	87.3	90.1	90.3	87.3	81.6	8.5
令和7年度・小4	84.0	88.0	86.1	82.8	78.9	9.1
令和8年度・小6	88.6	91.5	90.5	89.0	83.5	8.0
令和7年度・小5	85.1	89.7	87.3	84.1	79.4	10.3
令和6年度・小4	84.8	89.0	85.6	84.6	79.6	9.4
令和8年度・中1	89.9	93.0	92.1	89.5	84.9	8.1
令和8年度・中2	88.7	92.6	91.0	88.2	83.1	9.5
令和7年度・中1	88.1	91.9	89.5	87.2	83.7	8.2
令和8年度・中3	89.4	92.9	90.2	89.7	84.9	8.0
令和7年度・中2	86.2	90.4	89.0	85.1	80.4	10.0
令和6年度・中1	81.1	83.1	84.1	80.8	76.4	6.7

【分析結果】
身近な大人から支援を受けながら自分のことを自分で決められる」という実感は、全体として高い水準にあり、特に中学生では90%前後まで高まっている。一方で、学力層別に見るとA・B層とD層との間には8～10ポイント程度の差が継続して見られる。したがって、全体としての肯定率を高めるだけでなく、特にD層の児童生徒が『自分で決めることができる』『大人が自分の意思を尊重しながら支えてくれている』と実感できる支援の在り方が課題である。

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和8年度・小4	83.3	87.4	85.5	83.2	77.1	10.3
令和8年度・小5	83.1	85.5	85.2	83.5	78.3	7.2
令和8年度・小6	83.0	84.8	84.0	84.0	79.0	5.8
令和8年度・中1	81.9	84.5	83.3	81.2	78.4	6.1
令和8年度・中2	80.5	82.7	82.3	80.7	76.3	6.4
令和8年度・中3	81.5	84.3	82.9	81.4	77.3	7.0

質問内容：困ったとき、なやんだときは、身近な大人が話を聞いてくれている。
＜肯定的な回答割合と4層分析データから＞

【分析結果】
困ったときや悩んだときに身近な大人が話を聞いてくれるという実感は約8割と比較的高い。一方で、学力層別に見ると全学年でA層とD層の差が認められ、特に小4では10.3ポイントと大きい。また、中学校では全体値が小学校より低下しており、相談のしやすさという面で課題が見られる。今後は、特にD層の児童生徒が、困ったときに『話してもよい』『話を聞いてもらえる』と実感できる日常的な関係づくりを進めることが重要である。

【実態に応じた取組の工夫】

児童生徒が「自分のことは自分で決めてよい」「困ったときには身近な大人に相談してよい」と実感できるよう、日常的な関わりを大切にすることが重要になります。特にD層の児童生徒については、相談に来るのを待つのではなく、教員から積極的に声をかけ、短時間でも継続的に話をする機会を設ける必要があります。その際、「どうしたい？」「どちらならできそう？」など本人の考えや選択を尊重し、大人が答えを決めるのではなく、一緒に考えながら支援を進めていくことが大切です。まずは話を聴き、気持ちを受け止めることを意識しましょう。さらに、自分で選択したことや、困ったときに助けを求められたことなど、小さな成長や行動を具体的に認めることは、自己決定への自信を育てていくことにつながります。担任だけでなく、学年の教員や支援教育コーディネーター、養護教諭、スクールカウンセラー等、児童生徒が自分に合った相談相手を選べる体制を整え、「聴く・選ばせる・認める」関わりを継続することで、子どもの主体性を育て、相談体制を整えていくことができるのではないでしょうか。

・「子どもの権利学習」の実施

「川崎市子どもの権利に関する条例」に示されている**「7つの権利」**について知り、考え、深めることを通して、権利の実現を目指すことは大切です。

特に、身近な大人が子どもの年齢や成長に応じて対話し、相談しやすい環境を整えるなど適切なサポートを行うことは、子どもの「7つ権利」の実現に大きくつながります。子どもに関わる全ての大人が、子どもを「全面的な権利の主体」としてとらえ、子ども自身の人間性を尊重することが求められます。

子どもの権利学習資料







※参考 1. 人権教育の指導方法等の在り方について（第三次とりまとめ）2008年　文部科学省
2. 生徒指導提要　2022年　文部科学省

情報・視聴覚センター

質問内容：GIGA端末は学習の役に立つと思う。
＜肯定的な回答割合と4層分析データから＞

年度・学年	川崎市	川崎市学力層別				
		A層	B層	C層	D層	A-D層の差
令和8年度・小4	92.4	94.0	94.7	93.5	87.9	6.1
令和8年度・小5	93.3	94.0	94.5	94.0	90.6	3.4
令和7年度・小4	91.8	95.2	93.7	92.1	86.2	9.0
令和8年度・小6	94.6	94.8	95.4	95.6	92.6	2.2
令和7年度・小5	92.8	94.3	94.8	93.6	88.5	5.8
令和6年度・小4	91.9	95.6	93.5	92.4	86.1	9.5
令和8年度・中1	94.7	95.7	94.7	95.4	93.1	2.6
令和8年度・中2	93.8	93.3	94.6	94.0	93.4	-0.1
令和7年度・中1	93.2	94.1	95.1	93.1	90.5	3.6
令和8年度・中3	93.6	93.0	94.4	94.9	92.2	0.8
令和7年度・中2	90.4	90.7	91.8	91.5	87.6	3.1
令和6年度・中1	93.1	94.0	94.9	93.9	89.5	4.5

【分析結果】
　同一母集団のA-D層の差は、D層の数値が増加によって年度を追うごとに小さく、C、D層ほど増加量が大きい傾向がある。 同一学年の推移も肯定的な回答割合は増加傾向にある。

【実態に応じた取組の工夫】
　GIGA端末の学習への有用性について、同一母集団におけるA-D層の差が小さくなっており、相対的にC、D層の増加が大きいことがわかる。このことはタイピングやインターネット検索等のGIGA端末を学習利用する上での初期指導等の充実を図ることが重要であることを意味しており、早期に実施することがC、D層への支援として有効であると言える。
　さらに、自らの学びをよりよくするために初期指導の段階からさらに一歩進め、「探究の過程（課題設定・情報収集・整理分析・まとめ表現）」や振り返りといった学び方の習得を意識したGIGA端末の活用を進めていくことで、学習の基盤となる情報活用能力を質的に高め、学習内容の理解度の向上に寄与していくことが期待される。
　また、A、B層のGIGA端末の学習への有用性の増加量は相対的に小さく、頭打ちと解釈もできる状態にあるが、このような活用により、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を促進し、より深い学びへとつなげることができるため、有用性が高まるものと考えられる。したがって、今後は情報活用能力の高度な育成を意識し、教科横断的な視点を取り入れたカリキュラム・マネジメントの推進が重要であり、意図的に「探究の過程（課題設定・情報収集・整理分析・まとめ表現）」や振り返りに沿う学習場面を創出していく必要があるといえる。